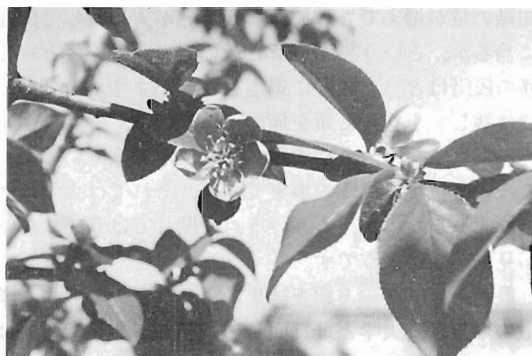
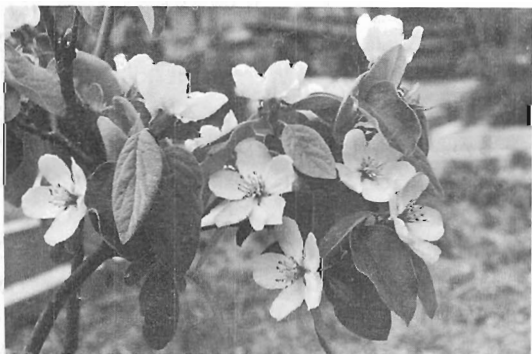


カ リ ン



カリンの花

カリン *Pseudocydonia sinensis* SCHNEID. (*Chaenomeles sinensis* KOEHNE) は、中国原産の落葉高木で、占くから庭木、盆栽として栽植されている。春に淡紅色～紅色、5弁の花を咲かせるが、花つきがサクラ等に比べて多くなく、また、新葉が少し伸びてから咲くのでそれほど見栄えはしない。しかし、果実は西洋梨型で7cm～10cmと大きく、秋、黄色の実を沢山着けた姿は見事である。この果実は黄熟すると芳香を放つが、



マルメロの花

堅くて酸味と渋みが強く、生食には適さないが、煮て砂糖漬けにすれば食べることが出来る。また、薄く輪切りにして乾燥したものを鎮咳、去痰薬とする他、焼酎で作った薬用酒（カリン酒）を咳止めや咽の痛みを抑えるのに用いる。中国では本植物の果実を縦割りにして乾燥したものを榧楨と称し、消痰、祛風湿薬とする。本植物は、材の木目がマメ科ヤエヤマシタン属のカリン類（*Pterocarpus* sp.）に似ていることから、この名がつけられたといわれる。家具、机などによくつかわれる、美しい波状紋のある、唐木の花欄（カリン）材は、本題のカリンではなく、マメ科のヤエヤマシタン属（*Pterocarpus*）のものである。しかし、本植物も名前の由来のとおり木目が美しいので、その材を家具などに用いる。混同されやすい花木に、ヨーロッパから渡米した、マルメロ（*Cydonia oblonga* MILL.）があり、長野県諏訪地方の特産品になっているカリンは、じつはこのマルメロである。カリンとマルメロの主な相違点は、カリンが高木で、成木になると樹皮が鱗状に剥がれて跡がまだらになるのに対し、マルメロは樹高がそれほどなく、樹皮が鱗状に剥がれないこと、カリンの葉には細鋸歯があるのに対し、マルメロには無いこと、マルメロの新しい枝、葉裏、果実の表面などに綿毛があることなどである。また、マルメロの果実は、カリンに比べれば、柔らかく生食できる点も異なる。しかし、焼酎漬けにして咳止め、痰切りの薬にする点は同じである。

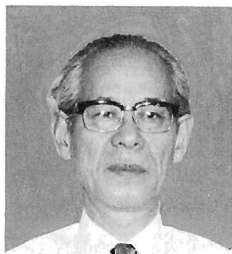
（文・小澤 貢、
写真・喜多俊二）



カリンの果実

就任挨拶

学生部長 森 下 利 明



「三十にして立つ」而立(じりつ)は、今日謂う処のアイデンティティ(identity)の問題かと思えます。人格の同一性と訳されるアイデンティティを、いま社会集団の一員としてのそれと考えますと、その集団のもつ価値観の中で、どれだけの義務や責任

を果たしてゆくかという、倫理的な自己としてのそれと云うことになります。とすれば、而立とはまさにこのアイデンティティの確立と、ほぼ同義と考えてよいのではないのでしょうか。

ところで、今も昔も青年期に直面する問題には変りがないと思うのです。しかるに、社会的な基本的生活習慣すら身につけていない学生たち、更には、指示されなければ何一つ積極的に取り組もうとしない彼等の無気力さ、課せられた事に対する無責任さ、文化一般に対する無関心さ、これらの事を目前にする時、主体性の確立ということを最大の課題と考えた私たちの学生時代との間に、大きな距りがあることを思わずにいられません。私たちの価値観で計れない若者を「新人類」と評してきたのですが、新人類も社会的人間に他ならない以上、何れは社会的義務を果たし倫理性を身につけなければならない筈です。彼等がそれをいつ身につけるのか、ということが私の年来の疑問でありました。

が、過日一精神科医の話を書いて、何程か気が楽になったように思えるのです。と云いますのは、何のことはない、それを解く鍵は人間の寿命が延びたことにある、というのです。

私たちの学生時代は、人生五十年、或いは精々六十年という意識が常に働いておりました。だからこそ、二十歳そこそこで自我の確立を急がねばならなかったのでしょう。孔子は「十有五」歳で学に志すという晩学でしたが、七十余歳まで生きておりますから、三十而立でよかったのでしょう。然るに、現代日本人の平均寿命はほぼ八十歳と云われます。このことは、社会人としてのアイデンティティ確立までの、モラトリアムの期間が大幅に延びたことを意味するわけです。近

頃、三十歳はおろか四十歳近くまで、精神的自立の出来ない人が増えて来ているというのは、全くの驚きであります。

学生の不法法ということに就ては、昔から寛大に見られて来ましたが、モラトリアムの期間が延びた今日、それが目に余るものになって来たことは否めません。知識の量が増えても、如何なることが人に対して失礼に当るか、という事すら解さない若者、彼等にとって躰の段階はとっくの昔に過ぎ去っています。所謂「しつけ残し」を抱えて頭を痛めているのは、もはや中・高校だけでなく、今や大学にまで及んで来ています。こういう現実は何れの事実ですが、それでは大学は何をなすべきなのか、そういう点に関しては有効な解答が見当らないようです。

最近のアンケート調査結果によれば、大多数の大学生の本音は、大学とは真面目に勉強にうち込む処ではなく、気楽にのびのびと自由を楽しむ場所、であるようです。学生の中に、本当に勉強をしたいという熱意が汲みとれない所以であります。

胃薬を飲みながら、そのような事についてあれこれと思い悩んでいる時に、皮肉にも学生部長に選出されました。老骨に鞭うって、と云いたいところですが、もう頑張ったり張り切ったりするトシでない事や、時の流れに抗することの無意味さを自覚しております。何よりも、アイデンティティの確立は学生自身の問題であります。それ故に、私たちは性急に彼等にその確立を求めるのではなく、この学生たちも十余年後には何とかなるだろうという程度の、長い目で見てゆくべきではないのでしょうか。このように考えると、今私たちに出来ることは、自覚への過程に不可欠である自己否定的契機、つまり、反省したり困難に対処したりさせるための材料を、彼等に提供する位のことでありましようか。それらは恐らく彼等の欲求に反するものでしょう。たゞ云えることは、彼等に迎合するだけでは而立への援助とはならない、ということです。

人間形成とは、知的、専門的教育も含めての問題ではありますが、学生部はより直接的に、こういう教育の根本問題に深くかかわっている事を思う時、シンからの疲れを覚えるわけです。大方のご理解とご支援をお願いするものであります。



就職状況中間報告

就職部長 沼田 敦

今年度の4年次生に対する就職ガイダンスは、卒業後の進路を早目に考えていただくため、昨年11月26日（当時3年次）に計画し、本学卒業生による職種説明会もあわせて催した。ついで第2回目（今年4月22日）のガイダンスの後、就職指導の参考のために志望職種調査を4月下旬に行った（表Ⅰ）。本年度は数社から会社案内のビデオを御恵与頂き就職活動の一助とした。今後さらにビデオの数が増加し、利用価値が高くなることを期待している。現在、4年次生の就職活動も一段落し、企業、大学院進学および公務員志望者の大半が内定するに至っているため、ここに進路内定状況を報告し、今後の参考に供したいと思う。

今年も昨年同様好景気を反映して各企業の求人数が多く、採用予定人員を確保できない企業がかなりあったようである。男子学生については、企業および大学院進学志望者が大半を占め、それらのほとんどが内定しており、あとは病院や研修生の受験者を残すのみである。現在の内定者は、79名で家業従事など就職を希望しない学生を除く就職希望者の87.8%に当たる（表Ⅱ）。学部男子学生に対する企業の求人は、職種では医薬情報担当（営業）が圧倒的に多く、内定を受ける学生も多い。この職種の求人は、約130社にのぼり、今年は41名が内定し、例年のように一部の会社に集中している。何人も同時に同じ会社に入社することは本人の将来を考えれば必ずしもよいとは云えず、もう少し数多くの会社に分散して、各自の個性を生かして活躍することが望ましいと思う。一方、研究開発、学術、品質管理等の職種の求人も結構多いので、営業以外の職種に興味をもっている学生には応募をすすめた結果、昨年より多く17名がこれらの職種に内定している。大学院進学者は本学をはじめ京大、広大、岡大などに17名が決定している。

一方、女子学生については、企業および病院希望者が大半であり、週休2日制の企業への就職希望者が昨年同様多いようである。昨年はかなり遅くまで企業へ

の就職を固執していた学生がみられたが、今年はやや早目に志望を変更している傾向がみられる。現在の内定者は企業62名、病院15名、大学院3名など計86名で就職希望者の66.2%である（表Ⅱ）。男子と比較すると内定率は例年どおり低いが、今後病院に徐々に内定者が増えて行くものと予想している。

（表Ⅰ）

平成2年3月卒業予定者就職志望状況

（平成元年5月1日現在）

		男子	女子	計	%	
業 業 社 会 社	製 薬	営業・管理薬剤師 ・事務	39	3	42	18.6
		研究・学術・開発 ・品質管理・技術	14	79	93	41.1
	卸 売	営業・管理薬剤師 ・事務				
化 学・食 品・化粧品会社		3	4	7	3.1	
機 器 販 売 会 社・商 社						
そ の 他 の 会 社・団 体						
病 院・医 院・診 療 所 (薬 局・臨 床 検 査)		4	32	36	15.9	
小 売 薬 局						
公 務 員	国 家					
	地 方	2	4	6	2.7	
大 学 職 員 (副 手・研 究 補 助 員)			2	2	0.9	
進 学	大 学 院 (修 士)	24	3	27	11.9	
	病 院 (研 修 生)	1	1	2	0.9	
そ の 他	自 家 業 (薬 局)	2		2	0.9	
	進 路 未 定	2	2	4	1.8	
未 提 出 者		5		5	2.2	
合 計		96	130	226	100.0	

(表Ⅱ)

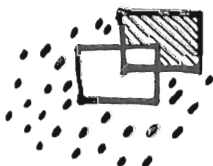
就職内定状況 (平成元年11月13日現在)

1) 会社

	医薬情報 (営業)		管理 薬剤師 事務	研究開発 品質管理 学術	
	M	F	F	M	F
アサヒビール				1	
アイシーアイファーマー					1
七野製薬				1	
エーザイ	2				
小野薬品工業	2				1
大塚製薬				1	
カネボウ				1	
関西薬材			1		
京都薬品工業				1	
協和発酵工業	2				
共栄和薬				1	
澤井製薬				2	1
三共	2				
サンド薬品			1		
堺化学工業				1	
三栄化学工業				2	
三星堂			1		
三和化学				1	
参天製薬				1	
サール薬品		1			
シオノギ製薬	2				5
シオエ製薬				1	
新日本薬品				1	
昭和産業				1	
住友製薬	2				
千寿製薬				2	
セブンフーセブン					2
積水化学工業				1	
大正薬品工業				1	
武田薬品工業	9				4
第一製薬	1				
大日本製薬	1				1
大田辺製薬	4				2
タマノ井酢				1	

	医薬情報 (営業)		管理 薬剤師 事務	研究開発 品質管理 学術	
	M	F	F	M	F
中外製薬	2		1		
ツムラ	2				
帝国化学産業				1	
東芝メディカル			1		
鳥居薬品				1	
日本アイビーエム					1
日本イーライリリー	1				
日本合成化学				1	
日本商事					1
日本製薬				1	
日本たばこ産業				1	
日本チバガイキー	2	1			1
日本粉末薬品					1
日本ベーリンガーイン ゲルハイム		1			
日本メジフィジックス					2
バイエル薬品	1				
藤沢アストラ					1
藤沢薬品工業	2				3
藤本製薬					1
ベーリンガーマンハイム					1
丸石製薬					1
マール					1
マンダム				1	
ミドリ十字				1	3
明治製菓	2				
持田製薬					1
モリタ			2		
山之内製薬	2				
ロート製薬				1	4
和光純薬工業					1
合計	41	3	7	17	52

M: 男子 F: 女子



(右頁下に続く)

爆発火災事故の報告

学長 藤 田 榮 一

平成元年5月10日午後2時20分頃、本学4階東棟の抽出室において蒸留中の溶媒の蒸気が漏れ、引火爆発事故が起きました。不幸にも大学院生一人と学部4年次生2人が火傷やガラス破片による傷を負いました。また窓枠、窓ガラス、天井、ドア等、爆発現場付近建物の損傷、研究機器の破損等学内に損害を被ったほか、学外一般家屋（岡田恒好氏宅）にも損傷を与えました。

3名の被害学生は、通院加療を受けこのほど幸い全快し、また学内外の被害物件の修復もすべて完了致しました。

事故発生後、直ちに学内に事故調査委員会を設置し、事故発生原因の調査を行い、調査書を理事会、拡大教授会に提出しました。次いで理事会は、懲戒委員会の答申を受けて、責任者に対する最終的懲戒を決定し、施行しました。

事故後の処理にあたっては、本学教員、職員の皆様ならびに学生諸君が一致協力して、誠心誠意事にあたり、消火作業はもとより事故による教育研究への影響を最小限にとどめ、また事故災害の復旧に全力をあげて御尽力をいただきました。改めて深く感謝致します。

こゝに本事故に関するすべての処理が完了したことを報告致します。そしてこの機会にこのような事故を今後絶対に起こさないよう本学構成員の皆様の御協力を心からお願い致します。

(平成元年10月11日記)

2) その他

	病院	病院	大学院		薬局		公務員
	薬局	研修生	M	F	M	F	F
岡山中央病院	1						
錦秀会阪和病院	1						
健和会	1						
城山病院	1						
高槻病院	1						
天理よろず相談所病院	1						
徳洲会	1						
奈良春日病院	1						
ハマノ眼科	1						
東生駒病院	2						
東住吉森本病院	2						
P.L.病院	1						
福德医学会病院	1						
関西医科大学附属病院		1					

	病院	病院	大学院		薬局		公務員
	薬局	研修生	M	F	M	F	F
大阪薬科大学			17	2			
岡山大学			1				
九州大学				1			
京都大学			1				
広島大学			1				
セガミメディクス					1		
ダイエードラッグ							1
楠公堂薬局							1
港町薬局							1
メディカル—光							1
奈良県							1
合計	15	1	20	3	1	4	1

M：男子 F：女子





昭和63年度法人決算について

事務局長 吉野 幸夫

去る5月29日に開催された理事会および評議員会において、学校法人大阪薬科大学の昭和63年度の決算が審議のうえ承認されたので、前例により、消費収支計算書の総括表によって、その概要を説明することとした。

消費収支の概要について

消費収支計算書は、当該年度の消費収入と消費支出の内容を明らかにするとともに、消費収支の均衡の状態をみるためのものであり、昭和63年度は、別表のとおりである。

昭和63年度においては、帰属収入の合計は、予算に比して1億3300万円余の増であり、消費支出の合計は、予算に比して1億2200万円余の減であり、従って、決算は予算に対しては形式的には2億5500万円余のプラス勘定となった。

このプラス勘定の結果として、基本金組入は、予算より3500万円余増で行うことができ、また収支の差は、予算においては8500万円余の赤字となるところ、決算においては1億3400万円余の黒字となり、平成元年度へは、この黒字と、昭和62年度からの繰越金2億9200万円余とあわせて、4億2700万円余を繰り越すことと

なった。

消費収支の内容について

昭和63年度における収入は、別表のとおり、収入の7科目は、事業収入を除いては、いずれも予算を上廻る増があり、特に資産運用収入においては、約定期間との関係もあったが、7600万円余の大巾増となったので、前記のように予算に比して相当額の増となったのであり、また昭和63年度における支出については、人件費に3000万円余の残があり、教育研究経費に6800万円余の残があるが、教育研究経費の支出残は、前年度と同様、主として建物の計画的補修の遅延によるものである。

基本金への組入について

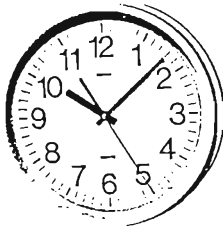
前号に記載したように、消費収入の部にある基本金組入額には、理事会および評議員会において、所定の組入額のほかに、将来の校舎建築のための資金として、毎年度1億円を計上することを決定しているのので、昭和63年度においても、基本金組入額合計の決算額3億3200万円余のうち、1億円は計画的組入であり、その余は一般的組入ということになる。

消費収支計算書総括表

〔昭和63年4月1日から
平成元年3月31日まで〕

消費収入の部			単位円
科 目	予 算	決 算	差 異
学 生 納 付 金	1,260,200,000	1,285,100,000	△ 24,900,000
手 数 料	67,900,000	83,912,100	△ 16,012,100
寄 付 金	0	7,683,750	△ 7,683,750
補 助 金	391,200,000	394,521,233	△ 3,621,233
資 産 運 用 収 入	120,000,000	196,735,889	△ 76,735,889
事 業 収 入	17,920,000	17,027,494	892,506
雑 収 入	41,000,000	46,199,592	△ 5,199,592
帰属収入合計	1,898,220,000	2,031,480,058	△ 133,260,058
基本金組入額合計	△ 297,000,000	△ 332,985,836	35,985,836
消費収入の部合計	1,601,220,000	1,698,494,222	△ 97,274,222

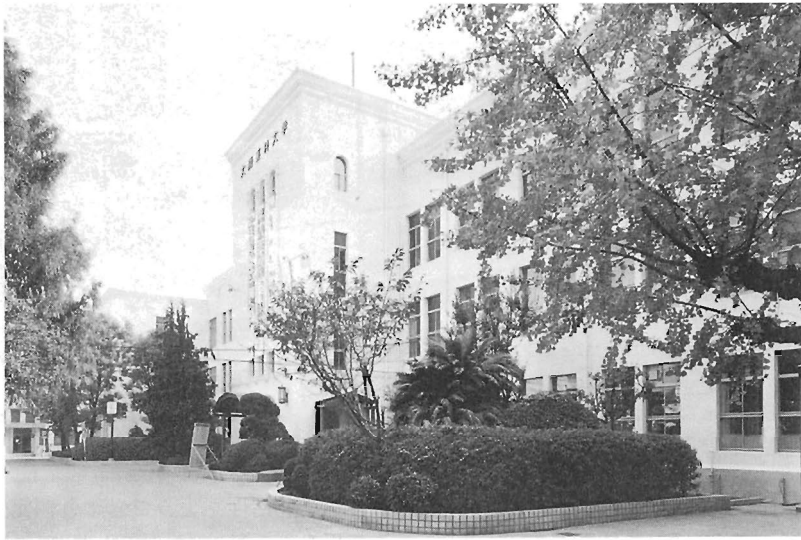
消費支出の部			単位円
科 目	予 算	決 算	差 異
人 件 費	1,061,630,000	1,031,087,350	30,542,650
教 育 研 究 経 費	509,620,000	441,099,039	68,520,961
管 理 経 費	67,830,000	73,952,641	△ 6,122,641
借 入 金 等 利 息	17,340,000	17,338,491	1,509
資 産 処 分 差 額	0	207,505	△ 207,505
予 備 費	30,000,000	0	30,000,000
消費支出の部合計	1,686,420,000	1,563,685,026	122,734,974
当年度消費支出繰越額	85,200,000	0	
当年度消費収入繰越額	0	134,809,196	
前年度繰越消費収入繰越額	292,209,864	292,209,864	
翌年度繰越消費収入繰越額	207,009,864	427,019,060	



同窓会より 掛時計の寄贈

このたび大阪薬科大学同窓会（曾根節子会長）から24個の掛時計の寄贈がありました。早速各講義室（12室）、各実習室（10室）、図書館閲覧室および学生会館談話室にとりつけました。ここに本誌上をかりて同窓会の御配慮に対し心から感謝申し上げますと共に、皆様にお知らせします。

学内施設の整備



今夏、とり行った整備工事については

- ①本館外壁改修その他工事
- ②教室放送設備取替工事

が挙げられます。

まず、外壁改修その他工事については、以前学報15号にて庇取付工事の際にお知らせしたように、外壁モルタルの浮き、剥離が目立ってきたため、浮きのひどい所はかき落として左官仕上げ、また軽微な所については、少しでも工期を短縮するためにヒン工法という手法にて浮きをおさえる手法をとり入れました。また、数年来閉鎖されていた西側4階に位置する2教室（41、42教室）が老朽化し、柱などの腐食が甚だしくなり、また荷重的にみても下の階に悪影響を及ぼしているとの調査結果から撤去しました。なお、改修後の仕上げ色には白系の色を採用し、また大屋根の塗色を緑色系のものとしたために、従前の色合いと比較するとすっきりとひきしまったのではないかと思います。80周

年史の中に引用されている記事に『布忍ノ駅ヲ過グレバ間モナク（略）遙カニ前方ヲ仰ゲバ小松林ヲ前景トシテ白垂ノ大建築ソソリ立ツ』とありますが、近鉄の車中や西除川に架かる橋あたりから家並越しに見る風景としては建築当初のたたずまいを彷彿とさせるものではないかと思われます。なお、この工事については当初想定していたより浮きの範囲が広く、工期が延びたことや、工事中の騒音等への学生諸君、教職員の方々のご理解、ご協力に対して誌上を借りてお礼申し上げます。

次に、教室放送設備の改修については、今春の電波法改正や、語学教室等の小教室でもワイヤレスマイクをとという教務課のアンケート結果から、父兄会のご協力を得て全教室に新しい設備を取付けました。従来より一層明瞭な講義が期待できると思われます。

以上簡単ですが今夏の主たる学内の施設設備を紹介しました。（施設課）

生理活性物質分離分析装置



周知のごとく、われわれの体内には、ホメオスタシス維持のため、ビタミン、ホルモン、オータコイドなどが存在し、それらが相互に影響を及ぼしあいながら働いている。これら生理活性物質の一つであるアラキドン酸代謝物、すなわちプロスタグランジン、トロンボキサン、ロイコトリエン、モノヒドロペルオキシ酸、モノヒドロキシ酸、リポキシンなどは、医学、薬学などの広い分野で、さまざまな方向から盛んな研究がおこなわれてきており、極めて強力かつ特徴のある生物活性をもつこと、さらに炎症や免疫反応をはじめ胃粘膜障害、癌などの病態にも関与することが、次第に明らかになってきている。

これらアラキドン酸代謝物の生体内での役割を解明するために、生体組織中に生成するごく微量のアラキドン酸代謝物を抽出、分離、定量しなければならない。しかしアラキドン酸代謝物は、構造類似の化合物群であり、従来の薄層クロマトグラフィーなどでは、再現性良く一斉分離することが不可能であること、また、アラキドン酸代謝物は、極めて不安定であり、短時間

にその生物活性を失うことより、定量に Bioassay 等を使用することが難しいことなどから十分な対応ができなかった。

今回、私立大学研究設備等整備費により導入した生理活性物質分離分析装置は、これらアラキドン酸代謝物の迅速な分離、定量を目的としたもので、高速液体クロマトグラフィー（HPLC）は、グラジエント方式により、生体試料中に存在するアラキドン酸代謝物を一斉分離する機能を、さらにプログラマブル フラクションコレクターは、HPLC からの溶出液を自動分取する機能を有し、Bioassay を行う試料を与えることができる。また、目的とするアラキドン酸代謝物が極めて短時間に生物活性を失う場合には、HPLC に直結したラジオアナライザーにより溶出液中の放射活性を連続的に測定し、各種アラキドン酸代謝物を定量することができる。さらに本装置を用いることにより、アラキドン酸代謝物以外の脂質関連物質の研究の発展も期待できるものと考えられる。

（藤田 直）

第二薬理学教室

教授 玄 番 宗 一



本学に赴任してから15年が過ぎました。現在、教職員として4人目の共同研究者亀山悦子副手に加えて、6名の4年次生（特別実習生）とともに腎臓薬理学と取り組む毎日です。今年度、院生は一人もいませんが、これまでに6名の大学院修了者と2名の研究生

（内1名は外国人）や94名の特別実習生も研究の進展に大きな役割を果たしてくれました。

薬理学という領域に足を踏み入れてから26年になりますが、ずっと“腎臓バカ”です。本学に赴任後しばらくしてから、薬学における薬理学の取り柄について考えてみましたが、はっきりとした解答を出せないまま「病態とくすりの開発」に関係した仕事をと思い、「急性腎不全」をテーマにしています。急性腎不全は、腎動脈を一定時間虚血後血流を再開した場合や、薬物の腎への有害作用などによって発症します。最近、制がん薬シスプラチンに大へん興味をもっています。シ

スプラチンは白金の錯体であり強力な制がん効果を有しますが、腎障害が用量制限因子となっています。シスプラチンが腎組織で過酸化脂質を増大させること、その腎障害が抗酸化剤で軽減されることなどから、シスプラチン腎毒性の一因にフリーラジカルが関与するらしいと考えています。

薬物による腎への有害作用に関連して、腎毒性を *in vitro* の系で評価する方法についても併せて研究しています。安全性評価のための動物実験には、ずいぶんの費用と時間がかかっています。動物愛護の観点からの非難もあります。動物実験に代わる毒性試験法（いわゆる毒性試験代替法）が将来的に確立される必要があり、腎毒性についてこのような評価系の確立に少しでも貢献できれば幸いと思っています。このために、培養細胞系をもちいて薬物の毒性研究を行っています。

以上が研究内容のあらましですが、これらの成果については薬理学会や薬学会はもとより、腎臓学会や毒科学会などが主な発表の場となっています。人的そして設備的には恵まれています。研究予算の慢性的赤字と研究室の物理的空間の不足には大へん悩まされています。

薬理学Ⅱを担当してきましたが、これまでの総講義回数は11月末で662を数えました。薬学における薬理学教育の役割は、薬を「つくる」と「つかう」ことにあると思います。これまでの教育の場において、薬を「つくる」教育にはかなり貢献してきましたが、薬を「つかう」教育には十分な成果をあげてこなかったと思えます。当教室ぐるみで、これからの薬剤師像にふさわしい薬理学教育のメニューを考えて、薬物治療の一翼を担えるような大阪薬大生の養成にかかわることができれば幸いと思っています。



前列左から2人目玄番教授、3人目亀山副手、他は特別実習生



UCLA 研修記

坂 田 勝 治

私は、1989年6月25日から9月17日までカリフォルニア大学ロサンゼルス校 (University of California, Los Angeles) (以下 UCLA と略す) の“Summer Sessions”で研修する機会を与えられました。ここに、感謝の気持ちを込めつつ、その研修生活の概略を御報告申し上げます。

UCLA は Los Angeles の西北部 Westwood の丘陵地に在り、東隣りには Hollywood の映画スターの住宅地で有名な Beverly Hills に接し、西隣りは Bel Air に接している。このことから想像されるように、UCLA は都市型の大学にしては珍しく緑の豊かさと敷地の広さに恵まれ、都会の便利さと環境の良さを兼ね備えている。また TV などでは、Los Angeles の治安の問題がよく報道されるが、Westwood ではその種の心配はほとんどせず済むようである。さらに気候について言えば、この地方は“South California”のイメージそのまま、年間を通じて「太陽と青空がいっぱい」の温暖で快晴の気候が続き、これは東部のアメリカ人の羨むところである（朝方に曇る日はよくあるが、午前11時を過ぎると雲ひとつない快晴になるのが特徴である）。この西海岸特有のカラットした明るさの中で、スポーツでも研究業績でも UCLA はまさに成長期に

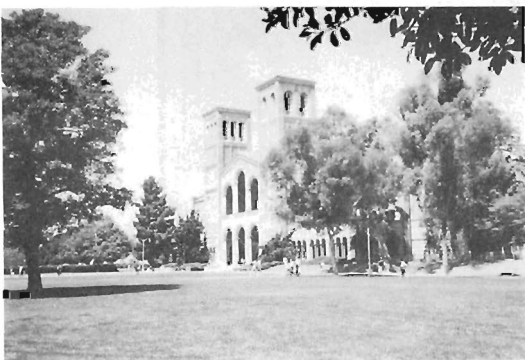
あるという感じで、若さとエネルギーに溢れ、健康的な清潔感がキャンパス中に漂っている。このような開放的な雰囲気の中で、13学部33,000人強（学部22,000人、大学院11,000人）が学んでいる。

(1) Summer Sessions

UCLA の授業は、アメリカの大学でもあまり多くない「クォーター制」(Quarters)を採用しており、年間が4学期に分かれ、それぞれの Quarter が12週間で完結して単位 (credit) を認定している。Regular School Year は、Fall・Winter・Spring の各 Quarter で、UCLA の学生しか受講できない。しかし Summer Quarter として“Summer Sessions”が設けられ、これは前半の First Session と、後半の Second Session に分かれ、それぞれが6週間で完結して単位が認定される。この“Summer Sessions”には UCLA 学生は自主参加の形で参加し、またアメリカの他大学の学生も（一定の資格のもとに）参加でき、外国人学生も審査によって受講を認められる（“The [foreign] students are screened for their abilities in English and their intentions as students.” — Gary W. Penders, Summer Sessions director.）。そして単位を取得すれば、その単位数は自大学での卒業必要単位に読み換えることができる。

また、この Sessions では学部と大学院の両課程とも実施されており、学生は自大学で開講されていない専門科目を受講できるので、この単位互換制は非常に便利かつ有益な制度であると思われる。さらに、後で述べる UCLA への Transfer（編入学）を狙って、この Sessions で高ポイントでの単位獲得を目指す他大生もいるようである。

1989年度の Summer Sessions の前半の First Session の受講者の内訳は、受講者13,000人中、UCLA 学生が $\frac{2}{3}$ で、残り $\frac{1}{3}$ が他大生等である。外国人は200人強で、そのうちほとんどがドイツ人とフランス人で



UCLA のシンボルの Royce Hall

ある ("Summer Bruin", Monday, July 17, 1989)。

なお、Regular School Year の学生に関して言えば、Los Angeles にはアジア系住民が多数住んでおり、それを反映して、UCLA の全学生中に占める彼らの割合が年々高くなってきている。

1988年の Fall Quarter における学部・大学院生の合計中の Ethnic 別の内訳は (表1) の通りである。

(表1)

ESTIMATED ETHNIC COMPOSITION

Domestic Students Only; i.e. citizens, immigrants, permanent residents

	TOTAL STUDENTS	
	#	%
American Indian	255	0.8
Black/Alro-American	2,140	6.7
Asian American	5,610	17.5
Pacific Islander	60	0.2
Chicano/Mexican American	2,565	8.0
Latino/Other Spanish-American	1,610	5.0
Filipino	1,070	3.3
White/Caucasian	18,420	57.5
Other	315	1.0
TOTAL DOMESTIC STUDENTS	32,045	100.0
FOREIGN STUDENTS	2,114	
INTERNS & RESIDENTS	1,567	
TOTAL CAMPUS	35,730	

(UCLA FACT BOOK 1989, P. 18)

(2) Drop-out and Transfer

Regular School Year の各 Quarter は12週で完結するが、それぞれの6週目に中間試験 (Mid-Term Exam)、12週目に最終試験 (Final Exam) が行われる。この他に小テスト (Quiz) が随時つけ足されて、その Quarter の合否が決定される。一方 Summer Sessions は幾分、集中講義的な要素を持ち、同一週に担当教授と何度も顔を合わせるのが普通である。しかもクラスによっては150分授業もあり、Coffee Break があるにしても、集中力を持続させるのは大変である。大学全体では午前8時から午後5時まで授業時間が設定されているが、(日本式の) 共通の第1時限とか第2時限というような統一した時間帯がなく、また全員が一斉に昼食をとるような昼休み時間というものもない。各クラスの週当たりの授業日数や時間数も異なるため、学生は自分の履修する科目の選択に工夫が必要になる。この組み合わせ方を密にして週当たりの受講科目数を多くすれば、例えば4年次生の Phill のように、今夏の Summer Sessions の単位で必要な卒業単位数を満たし、次の



Powell Library

Fall・Winter・Spring の3 Quarters は授業に出る必要がなくなってしまう。そしてその間は外国で勉強して、6月に卒業式のために戻って来る、というような事が可能になるのである。

ところで、各科目の最初の授業の日に全員に syllabus (教授細目) が配られ、その期間中の授業計画が示され、そしてあの(頭の痛い)課題本のリストが与えられる。この課題本は量的に負担が大きく、授業に先立って読破しておくのは並大抵ではない。キャンパスのあちこちで、リラックスした格好で芝生や木蔭に寝そべて本を読んでいる学生の姿がごく日常的に見られるのは、このためである。

Summer Sessions では3週間ごとに "Mid-Term" と "Final" の試験が繰り返されるので、学生にとってはかなりきつい日程になる。"Final" の頃になると大変で、図書館は24時間開放され、日暮れから午前1時まででは、"Don't Walk Home Alone." のモットーで、女性に対する Escort Service が無料で行われるのは、アメリカというお国柄のせいだろうか。図書館内の掲示板に次のようなポスターが貼ってある (表2)。

(表 2)

UCLA ESCORT

- 365 days a year
- dusk to 1 a.m.
- radio dispatched
- Free

(Please call 15 min. in advance)

履習科目の成績は(表3)のように、A・B・C・D・F等の記号で表示され、それぞれが対応する点数(point)に換算される。このpointにその科目の単位数を掛けて Total Grade Point が得られる。これを合計して平均点を出す。この履習した全科目の平均点が重要で、在学資格の最低平均点は2.0である。それで、学生は高いポイントの平均点を目指して、あるいは最低の2.0に対する攻防で血眼になるのである。この Average Point が、Honor Degree や、奨学資金や、Drop-out や、Transfer など、学生のその後の生活に多大の影響をもたらす。例えば Fall Quarter の平均が2.0以下になれば、その学生には警告が与えられ、要



Drake Track Stadium

(表 3)

Undergraduate Students	Graduate Students
A = Superior	A = Superior Achievement
B = Good	B = Satisfactorily demonstrates potential for professional achievement
C = Fair	C = Passed but work does not indicate potential for professional achievement
D = Poor	F = Failure
F = Failure	S = Satisfactory (achievement at grade B level or better)
P = Passed (achievement at grade C level or better)	U = Unsatisfactory
NP = Not Passed	I = Incomplete
I = Incomplete	IP = In Progress
IP = In Progress	DR = Deferred Report
DR = Deferred Report	

Grade points per unit are assigned by the Registrar as follows:

A+ = 4.0	C+ = 2.3
A = 4.0	C = 2.0
A- = 3.7	C- = 1.7
B+ = 3.3	D+ = 1.3
B = 3.0	D = 1.0
B- = 2.7	D- = 0.7

F, NP, U = 0

(UCLA General Catalog 1989-90, P. 66)



University Research Library

観察者にされてしまう。もし次の Winter Quarter でも累計が2.0以下になれば、その学生は自動的に退学(Drop-out)になる。つまり UCLA に入学しても、最短の期間では2 Quarters (6ヶ月)で退学を余儀なくされてしまう。処理の仕方はきわめて事務的なので、学生は在学し続けるためには、うかうかしておれないのである。従って、科目選択の履習届の提出はきわめて慎重を要する。なぜなら、日本の大学ではたとえ或る科目を選択して不合格になっても、『単位を取れなかった』だけですませられるが、UCLA では不合格

ならFの評点で0点が与えられ、これが平均点の計算に加えられるから、重大問題になる。だからこの制度は学生にとってかなり厳しいものであることがわかる。そのため、或る授業に数回出席した後、履習届の撤回が許される期限内に（つまり、成績に残らないようにする事ができる期間内に）、その科目を継続するか、その科目をDrop-outするかの見きわめをすることが重要になってくる。

しかしその一方で、この厳しい成績基準と表裏一体を成しているのがTransfer（編入学）の制度であり、UCLAでは他大学での成績さえよければ（つまりAverage Pointsが高ければ）、比較的容易にTransfer生を受け入れているように思われる。

(3) 言語材料の蒐集

アメリカの東部は歴史的にも社会的にも“established”な世界であるという面を持っている。それで言語に関しても過去の遺産の継承を重視する立場から、どうしても保守的になり、固定化の傾向を持つことは否定できない。それに反して西海岸地方は“Rising Country”として、新興の意気に燃える若い発展期の地域であり、東部と較べて、より個性的で創造的な傾向を導ぶ風潮が生まれてくる。このことは言語現象にも現れて、「伝統的」な用法の枠を越えた表現が生み出されやすい。特に若い世代の人の話す英語にそれが顕著に現れている。いわば、西海岸地方は「新しい英語」の発祥地であり、新しい言語材料を蒐集するのに格好の場でもある。

UCLAの学生も例外にもれず、新しい単語、新しい用法、新しい表現を生み出している。それらを蒐集して出来た本が、UCLAの言語学科の編集したU. C. L. A. *Slang: A Dictionary of Slang Words and Expressions Used at U. C. L. A.* (ed. by Pamela Munro, UCLA Occasional Paper in Linguistics, #8, 1989)である。この本はすぐさま*Los Angeles Times Magazine* (August 13, 1989)の書評で取り上げられ、“Slang is indispensable to campus and reflects its nature.”と述べられ、英語の乱れを引き起こす危険性はあるが、世相の反映である、と論じられている。

私が学内で耳にしたものでも、次のようなのがごく普通に学生によって使われている。

“Yo” = Hello, Hi.

“What’s up?” = How are you getting along ?

“rad (radical) = good. (Cory君の解説によると、カリフォルニアで使うが他州では稀)

“bogus” = not good or false.

(カリフォルニアの若者に特有のこと)

また発音自体もかなり特徴的なカリフォルニア式発音がある（例えば、walkを[wɔ:k]ではなく[wɑ:k]と発音することなど）。ところで発音に関して言えば、欧米人が話す時の口の形の多様な変化と早い動きや、舌の動きの活発さと速さには、あらためて感心させられる。それに全体的に言って彼らの発する声の力強さは、例えば彼らが遠くから人を呼ぶ時の、あの力強い太い声を聴けば、よく理解されるであろう。日本人はどうしても口や舌の動きがゆるやかであるが、これは子音の少ない日本語のためであり、いかんともしがたい。しかし、日系人ならば、欧米人と同じように速く口や舌を動かして、力強い音声を発するのだから、これは全く環境のなせるわざなのだ。

(4) Anderson 教授研究室

Summer Sessionsの間、数多くの授業に出席し、理解不十分なこと多々あったが、それぞれから教えられるところが多かった。また昨年度“Jewish-American Fiction”の講義を受けたMaximillian E. Novak教授とも再会して、教授の研究室で改めてSaul Bellowについての話しを聴けたのも、幸いであった。しかし今夏、一番印象に残った授業は、Walter E. Anderson教授の『英詩概論』(Introduction to Poetry)である。英米の詩を各時代にわたって代表的な作品を読み進むのだが、本人自身が詩人でもある教授の解説には首肯させられるところが多々あり、時にはハッとて、眼から鱗が落ちる思いを経験することがたびたびあった。授業は80分で、週3回あった。例によって最初の授業の時にsyllabusが配られたが、膨大な量の作品リストに先ず驚かされる。日本人が英詩を読む時は、先ずその意味や背景の理解に時間をとられるが、nativeの人



木蔭のテラス

には当然ながらその必要がないので、どんどん読み進むことになる。しかしこれについていくのは、外国人学習者にはかなりハードであった。

このクラスで面白かったのは、突然ハプニング的な discussion が起きることである。或る時、成績 (Grade) のつけられ方を気にした女子学生の質問から端を発して、詩の鑑賞態度についての活発な議論が起こった。学生達の主張の要点は、授業で取り上げる作品を事前に暗記させられるのは不本意だということであった。これに対して Anderson 教授は、自らが詩人であることもあってか、詩を「鑑賞」するためにはまず眼で読み、次に声をだして音を感じとり、自分の身体全体で「感覚的に」感じることが何よりも重要であるという。これは鑑賞以前の基本的なプロセスであり、これを抜きにしては詩の鑑賞はあり得ないと説き、詩のリズム、音楽性、音声効果を重視する立場を教授は力説された。この日の discussion は後で振り返ってみた時、非常に有意義であったことがわかった。ところで前述したように、学生にとって履習科目の選択が平均点に直結するため、一般的に授業が始まって最初の2週間ぐらいは「見物客」的な出席者が多い。Anderson 教授のクラスも最初は35名ぐらい居た出席者が、いつの間にか18名に減った。これが最終履習者となった。Grade をつけられる学生である。

ところで、授業自体に興味があったのだが、Anderson 教授とは別の発展が生まれた。教授の研究室で Emily Dickinson の詩の手法を話していた時、日本の俳句について話が及んだ。というのは、Dickinson は俳句の勉強をしていて、その手法を自作に応用していたからである。そして話は松尾芭蕉の英訳に及び、Penguin Book 版の英訳を2人で検討した。この過程で教授は主として音声面から、その英訳に満足しないように思われた。それで結局、新しい英訳を2人で試しに作ってみようという事になり、作業がただちに開始された。思いがけず UCLA で芭蕉の作品を読む羽目になった私は、大学研究図書館 (University Research Library) 内にある "Oriental Library" に行って『奥の細道』や『芭蕉句集』などを読み始めた。この作業はその後ずっと続き (現在も進行中である)、この作業でかなりの時間が費された。しかし、教授の研究室で何度も行われた discussion は非常に楽しかったし、さらに、この英訳の作業を通じて、逆に英語の詩そのものについての勉強ができたことは予想外の喜びであった。そしてこの時献呈された教授自身の未発表の自作の詩は、何よりもすばらしい記念品であり、



英文科のある Rolfe Hall

自宅に招待された時に食べた、奥さんの Judy の料理になる純日本式の "SASHIMI" の味とともに、今回の UCLA 研修での楽しい思い出になった。

Anderson 教授自身は、私を前にして日本の俳句を論じながら、小さい頃、日米戦争のために「反日教育」を受けたことと、当時の異常な世界情勢を複雑な心境で回想しておられた。一方私自身も、今日の日本経済のアメリカ進出ぶりが不思議に思われる。16年前に初めて Boston に近い University of New Hampshire へ行った時は、外貨の持ち出しは500ドルに制限されていた。それが今では何の制限もなく、長く続いた固定金利制の1ドル360円が今は変動金利制になり、昨年は1ドル125円、今年は130~140円と、大幅な円高になっている。隔世の感がある。

(5) キャンパス生活

広い敷地と緑の環境、恵まれた諸設備——これらは日本とは比較にならないので、ただ「羨ましい」の一語のみである。研究・福利厚生施設の充実ぶりや、600万冊の蔵書を誇る図書館は勿論のこと、美術館、博物館、映画館、劇場、演奏会場、彫刻公園や、建築都市計画学部という珍しい学部の公園など、UCLA には芸術関係の施設が数多くあり、これらが医学部などの巨大施設とよく調和を成している。

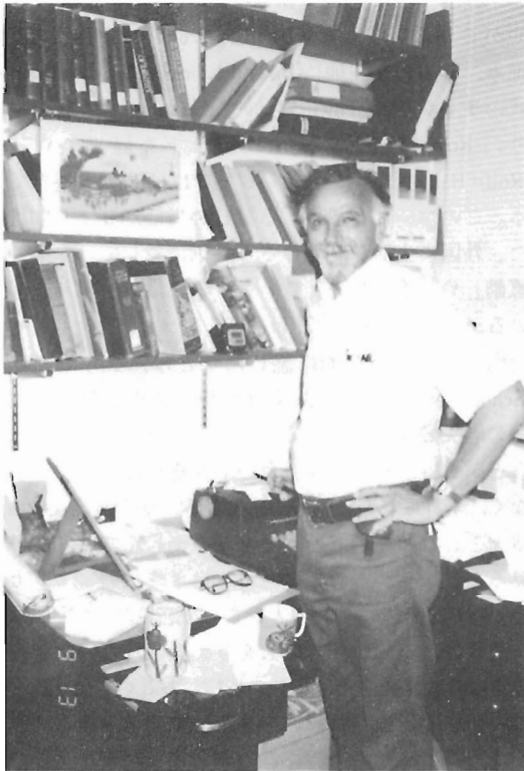
UCLA のシンボル・タワーの Royce Hall や、音楽学部の Schoenberg Hall では、〇〇財団援助とかの類の無料コンサートが何回となく開催されて、一般市民に開放されている。それで、一般市民や学生は Los Angeles Philharmonic や Institute の演奏を気軽に聴くことができる。この種の演奏会に行っても常にも思うことは白髪の老夫婦達の姿が非常に多いことで、心から音楽を楽しんでいるその姿には心をうたれることがしば

しばであった。

一方スポーツの面では、1984年の Los Angeles Olympic Games の時、オリンピック委員会の事務局が UCLA 内に設置されたことはよく知られていることである（この建物はその後 UCLA Visitor's Center になっている）。そしてキャンパス内の学生寮が選手村になった。全天候型の Drake Track Stadium の観覧席は 11,000人以上の収容能力があり、陸上選手はこのトラックで練習したそうである。その他、バスケットやバレー専用の巨大な体育館など、贅沢な施設が点在している。

一般学生はこれら施設を自由に利用して、スポーツを楽しんでいる。しかしスポーツには無縁な私は、前述の University Research Library や Powell Library をほとんど毎日のように利用させてもらい、貴重な資料をほとんど何の制限もなく自由に利用させていただいたことに対しては、改めてこの場で感謝の言葉を述べておきたい。

学生が最もたくさん集って来るのは学生売店の Ackerman Union の建物である。しかし、売店といっても、これは大きな shopping center というべき規模のもので、食堂・書籍売場・日常品売場などが supermarket



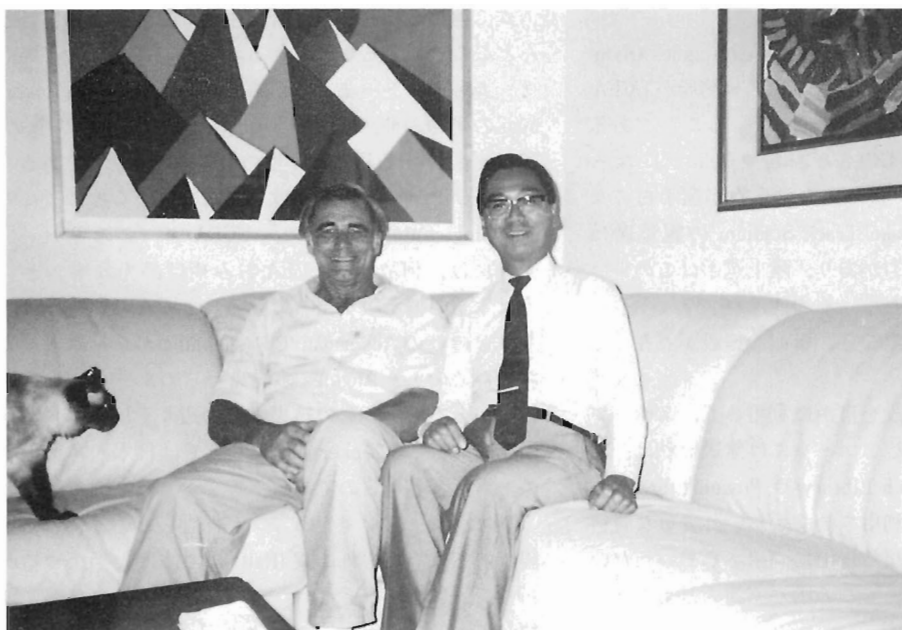
Rolfe Hall の Novak 教授室

方式で運営されていて、日常生活に必要な品物はほとんどここで揃える事ができる。さらにボーリング場やゲーム・センターまでもがある。それで、この Ackerman の建物の前の広場、UCLA のマスコットの熊の "Bruin" 像がある辺りは学生の格好のたまり場である。ここでひと言つけ足さなければならないことは、この shopping center の一角の、UCLA マークの T シャツ売場には、何故か「UCLA おみやげ品売り場」という日本語の掲示板が掛っていることである。それは、UCLA のこの Ackerman での shopping が、日本人観光客のための Los Angeles の観光バスのルートに入っているからである。その結果、この辺りでは日本語が飛び交い、そして Ackerman にとっては日本人客が最高の上得意客となるのである。

学生寮はまるでマンションが林立している感じで壮観である。それぞれの寮 (Hall) の中には大きな食堂があって、各自が好きなメニューを選んで食べるが、種類が多いのは有難い。ケーキ、ice cream、果物、飲み物類のコーナーがずらりと並んでいるが、驚いたことには、アメリカの学生（一般市民も）は食事時にコーラをガブ飲みすることである。私はたとえば、England 風味の紅茶を選んで日本茶に代えて飲んでいたが、結構、緑茶の代用として使えた。

アメリカの大学での寮生活も、今回で4度目である。寮生活の勝手もわかっているし、経費節約のための覚悟の上でのことであるので、寮の食事も満足して食べられるし、若い学生との共同生活も違和感はあまり感じなかった。かえって、アメリカ人学生気質が肌で感じられるし、いろんな情報も得られて有難かった。寮の食堂風景も興味をもって観察できた。あちこちでドイツ語、フランス語、スペイン語などが聴かれ、international な雰囲気醸成が醸し出されていて面白かった。昨年はこの種のマンションのような建物のひとつである、Dykstra Hall で生活したが、今年度はロッジ風の Hitch Residential Suite の中に一室をひとりで与えられた。だから、食事の時のみ Hedrick Hall の食堂に来ることになった。それで Hitch Suite での話し相手はもっぱら、Resident Assistant の Rick（大学院生・心理）ということになり、彼の中古の車で Dodgers Stadium で野球見物をしたり、人並に Disneyland へ行く結果になったのである。

ところで、このような恵まれた学園で学び、諸施設を利用できる UCLA 学生の Regular School Year におけるそれぞれの Quarter の授業料は（表4）の通りである。



Anderson 教授の自宅で

ルニア住民の学生の1年間の平均的な University Fees は 1,634ドルで、これは驚くほど安いとすることができる。それで California 住民の学生が UCLA 寮に入れば、年間の生活費は(授業料・本代・食費・その他の経費)は7,429ドル程度であり、アパートに入れば約8,699ドルだと言われている(UCLA General Catalog 1889-90, P.30.)。

(表4)

Student Fees Per Quarter

(Effective Fall 1988)

	Undergrad.	Grad.
Registration Fee	\$198	\$198
Education Fee	\$280	\$280
Associated Students Fee	\$ 10	
Graduate Student Assoc. Fee		\$ 5
Student Union Fee	\$ 4	\$ 4
Wooden Center Fee	\$ 5	\$ 5
Nonresident Tuition	\$1,502	\$1,502
TOTAL FEES		
Resident	\$ 497	\$ 492
Nonresident	\$1,999	\$1,994
(Beginning with the winter 1989 quarter, the nonresident tuition will be \$1,652)		
School of Law, Fees Per Semester:		
Resident	\$ 759	
Nonresident	\$3,012	
School of Medicine, Fees Per Semester:		
Resident	\$ 739	
Nonresident	\$2,992	

(UCLA Facts 1988-89)

UCLA の年間の平均授業料自体が、東部の Ivy League の大学の授業料に較べてかなり安いのであるが、この表からも分かるように、カリフォルニア (Resident) 住民である学生は他州から来た UCLA 学生の授業料の1/3の授業料ですむ。従って、カリフォ

(6) 終りに

Hitch Suite の自室を出て丘を下り、"Bruin Walk" を下って平地に達し、Drake 競技場を左に見て歩き、やがて UCLA のマスコット像 "Bruin" の熊を右に見て進み、前方の丘陵地に Powell Library のロマネスク様式の美しい Bell Tower を仰ぎ見て、芝生の斜面を登り、Royce Hall の Twin Towers 下を経て、やっと Rolfe Hall の教室に到着するまでには30分は過ぎている。このコースを往復する毎日の生活が3ヶ月間続いた。外国に生活して、今さら外国に対して「無条件の感動」や「手放しの礼賛」をするには年をとり過ぎているが、やはり感じる所はある。アメリカに対しても、今回の滞在で印象的に感じたことは、Royce Hall や Schoenberg Hall での演奏会の時、会場で見られた白髪の老夫婦達の快活な姿である。クラシック音楽だからといって、無意味な気負いや身構えなどすることもなく、素朴に音楽そのものを楽しみ、演奏会後などに、晴々とした顔をして仲間と会話を楽しんでいる様子を見ると、なぜかその姿に、古き良き時代のアメリカが感じられ、そこに「心の大きさ」を感じたものだった。

最後に、この研修の機会を与えていただいた学長先生をはじめ諸先生方、職員の皆様にお礼の言葉を述べ、この研修で得られた経験を授業の中で学生諸君に還元できることを念じつつ、この報告書を終えさせていただきます。(おわり)

第24回大薬祭を顧みて

学生部長 森 下 利 明

前・後夜祭の最後に組まれていた馬鹿デカイ音量のディスコも、予定の8時には終了し、心配していた近所からの苦情がなかったことは、何よりの幸いであった。準備、進行、後片付について、執行部をはじめ一部の学生諸君が、実に熱心に、節度をもって行動していたことは、十分に承知している。併し残念ながら協力体制が不十分なために、一部学生の負担が過重になっていたことも否めない。これは例年のことながら、如何にしてより多くの学生を祭に参加させるかという事が、やはり今後の課題として残る。何れ反省会を開く予定であるが、その前に私見を幾つか述べておきたい。

① 先ず、準備が非常に遅れていたことが指摘されよう。前学生部長に、今年度の予定表や諸注意まで作成してもらい乍ら、それを十分生かすことが出来なかったし、またリーダーズ・キャンプも有効に生かされたとは思えない。それは何故か。学生側にはそれ相応の理由があろうが、結局は協力体制の弱体ということに帰するのではなからうか。今日の若者は、悪しき個人主義に徹してバラバラであると評される。しかし、戦中に、組織化され厳しい統制を受けてきた苦い経験をもつ私としては、普段はバラバラでよいのではないかと思う。号令にすぐ反応するような体質は問題である。但し、大薬祭を成功させるためにはそれでは具合が悪い。大薬祭という同じ一つの関心の下に皆が集って、その限りにおいて互いに協力をし、自ら引き受けたパートに全責任をもつという体制作りは、是非とも必要であろう。この体制が最初に来ていないのである。委員長一人が頑張ってもどうにもならない。今年のパ



ンフレット作りの、校正もしないズサンさなどは、その一端を示すものと云えよう。

② 次に、体育大会はとも角として、大薬祭には文化クラブがもっと積極的に参加し、日頃の成果を発表すべきではないか。数年前までは、松原会館を借りて文化発表を行っていたが、その頃のような熱心さが見られない。学外で多額の費用をかけて発表するよりも、学内発表に力を注ぎ祭を盛り上げる努力をしなければいけないと思う。大薬祭は主として文化発表の場であるべきであって、非文化は影をひそめるべきであろう。

③ 費用がかかり過ぎる。大薬祭は大薬生自らのつくり出した文化発表の場であるとすれば、たいした金のかかるわけがない。当初500万円があつて、それを如何に分配して使うかということではなく、逆に、先ず大薬生の発表する内容があつて、それにどれだけ金がかかるかという事でなければならない。発想が逆さまになっている。プロ・コンサートやタレント講師を、直ちに非文化と極め付けるつもりはないが、それだけのために245万円の支出はどう考えても問題がある。

④ 学生自身の祭であるから、楽しい出し物があつても然るべきだし、ビールの販売がいけないというわけではない。しかし、毎年「酔いつぶれ」がゴロゴロしているのはどんなものか。今年も救急車の厄介にならざるを得なかった事は、その辺の知識が最も豊かであるべき筈の大薬生にとって、不名誉極まることと云わざるを得ない。「一気飲み」を厳に戒めているにも拘らず、全く徹底していない。最も華々しく氣勢をあげていたのは、私の知る限りでは、体育クラブ女子学生であり、酔いつぶれも女子の方が多数であることを付け加えておきたい。学内でかかる自制すら出来ないという事は、果して学生自身に自治能力があるのかどうか、という疑いを抱かせるに十分と云わざるを得ないのである。

以上あげた諸点からしても、大薬祭は既に新しい視点から考え直す時期に来ているのではないかと痛感する次第である。

学生部だより

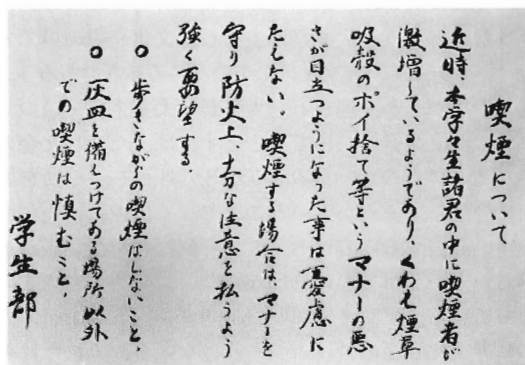
■防火管理規程が整備される

5月の爆発事故を契機として大阪薬科大学防火管理規程が整備されました。その第13条では建物内外において、喫煙の指定を受けた場所以外では禁煙を遵守しなければならない。と定められています。

したがって廊下や教室でのくわエタバコやそのポイ捨ては厳禁とします。喫煙者諸君のマナーの向上に期待します。

なお省エネ、学内美化、防火のため自習等に教室を利用したい学生には、本館3階33教室を常時開放しています。

また、全学的に防火、防災意識の高揚が叫ばれている今、各教室の最終退出者は必ず消灯、火元点検を励行して下さい。



■ 献血に協力しよう

本学では6月、10月の年2回、Give Blood Save Life (命を救う愛の献血)のキャンペーンテーマのもと、団体献血を行っています。献血とは病気やケガで血液を必要としている人が、いつでも安心して輸血が受けられるように、健康な人々が代償を期待せず、強制されず、自ら進んで自分の血液を提供する崇高な行為です。献血による血液への需要は年々増加していますので、教職員・学生諸君のなおい層のご協力をお願いします。

年度	昭和61	昭和62	昭和63	平成1
200ml献血者	164	153	110	178
400ml献血者	9	9	14	18
計	173	162	124	196



ます。(本年度は7年ぶりに献血者数の減少傾向に歯止めがかかりました。)

■ バイク、自転車の夜間・長期放置はやめよう

現在バイク約10台、自転車約40台もの夜間・長期放置がありますが、去る10月4日の深夜、バイクの部品盗難事件が発生しました。所有者は施錠を確認するとともに長期間の放置をしないよう注意して下さい。



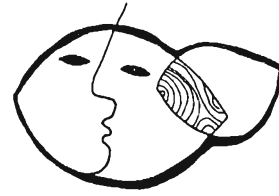
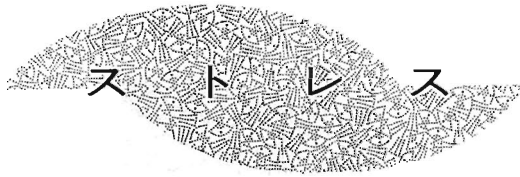
■ 教務課だより

○例年のことであるが、選択科目履修届を締切後に持って来た人が何名かいた。まだ、これから受験届もあるので、くれぐれもご注意願いたい。

締切に間に合わない場合は友人に頼むとか、教務課へ電話をすとか方法はあはずである。

こちらとしても受付を断るのは大変心苦しいことを知って頂きたい。

■保健室だより



社会人、学生に関係なく、多忙で気疲れ（ストレス）がたまっていると感じている人は案外多くいます。ストレス病は誰でもが多少はかかる病気ですが、問題はその程度といえます。

ストレス病は、仕事（勉強）熱心で正直、凝り性、几帳面、責任感が強いといった性格の人がかかりやすく、高血圧症、心臓疾患、脳動脈硬化症、糖尿病など成人病の多くは、過剰な精神的・肉体的ストレスによって発生するといわれています。

〔症状〕

頭が重い、目が疲れる、胃の調子が悪い、肩がこる、イライラする、不安や不眠が続く、倦怠感や食欲不振がある、生活のリズムが崩れるなど、心身に自覚症状がみられる。

〔予防、対策〕

自分の健康は自分で守るという心構えで、健康の維持増進の大切さを自覚し、ストレスが高まったと思ったら、それなりの対策（ストレス解消法）が必要である。

- ① どうも疲れやすい、気分がすぐれない、胃の調子も悪い、という人は早目に十分な休養をとり、気分転換を図る。
- ② 仕事（勉強）人間をやめて遊び心をもつ。
- ③ 自分に合った趣味をもつ（何もすることがなく暇であることがストレス要因になる困った現象もある）。
- ④ 頑固一徹をやめ妥協もする。
- ⑤ 細かいことにこだわりすぎずクヨクヨしない。忘れることも大切である。
- ⑥ 不満や愚痴も言い（聞いてもらい）、怒りを発散させる。
- ⑦ 生活上、心の豊かさも必要で、バランスのとれた食生活を心がけ、心身両面からストレス耐性（抵抗力）を強める。

ストレス度自己チェック法

最近1か月間で思いあたる項目に○印をつけて下さい。

1. 家庭内でいろいろ問題があった。
2. 仕事の上で多くの変化があった。
3. 日頃から楽しみにしている趣味がない。
4. いつもやっている運動がない。
5. 気分が沈みがちで憂うつである。
6. ささいなことで腹が立ちイライラする。
7. 仕事をする気がなくなり疲れやすい。
8. 人に会うのがおっくうで何でも面倒くさい。
9. 前日の疲れがとれず朝方から体がだるい。
10. 寝つきが悪く夢を見ることが多い。
11. 朝気持ちよく起きられず気分が悪い。
12. 頭がすっきりせず頭重感がある。
13. 肩こりや背中、腰が痛くなることがある。
14. 食欲がなくなり次第に体重が減ってきた。
15. 腹がはり下痢や便秘を交互に繰り返す。
16. 目が疲れたり目まいや立ちくらみがある。
17. 急に息苦しくなったり胸が痛くなる。
18. 手足が冷たく感じたり汗をかきやすい。
19. よく風邪をひき、治りにくく長びく。
20. 医師の診察をうけても気のせいだと言われた。

〔判定〕

○印の数が5以下：正常範囲

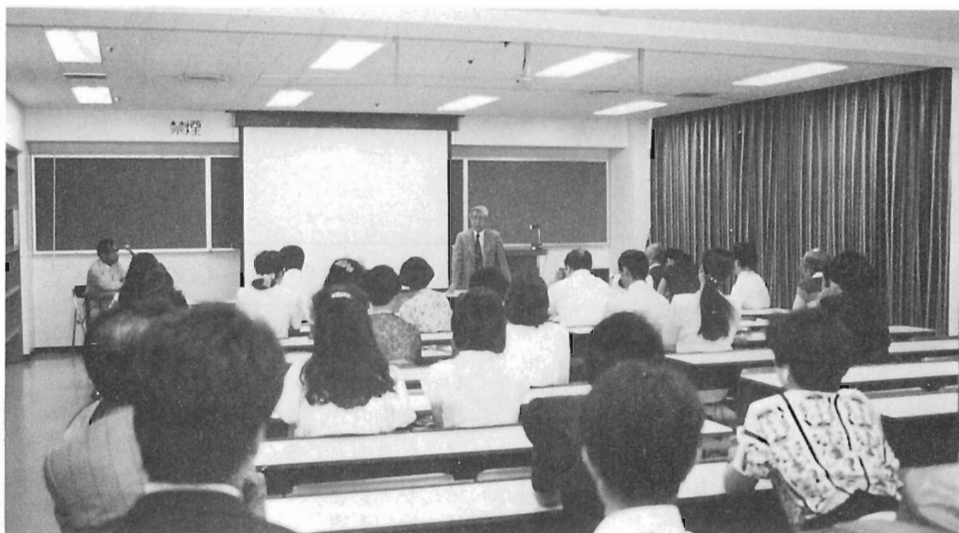
5～10：ストレス予備軍

11～15：ストレス状態（要注意）

16以上：ストレス病（要医療）

- ◎「保健室だより」で今後取り上げて解説してほしいテーマがありましたらお知らせ下さい。
(既掲載テーマは腰痛・肩こり・ストレスです)

平成元年度公開教育講座



本学卒業生並びに医学・薬学に関心を有する社会人を対象として最新の医学・薬学の知識、情報を与えることを目的として昭和58年度に卒後教育講習会として発足した本講座も回を重ねて本年度は第7回の公開教育講座が開催された。8月下旬から9月上旬にかけて昨年同様土曜日の午後、大阪科学技術センターにおいて、各界の権威をお招きすると共に本学の教授陣も参加して下記のとおり行なわれた。

受講者の関心は極めて高く、来年度以降についても多大の期待が寄せられている。

8月19日(土)

微生物のリスクアセスメント

大阪大学薬学部 教授 西原 力

心臓移植の背景と現況

大阪大学医学部 教授 川島 康生

8月26日(土)

病院薬剤業務へのコンピューターの導入

高知医科大学医学部附属病院

薬剤部長 西岡 豊

生薬・薬用植物 ～最近の研究から～

大阪薬科大学 教授 小澤 貢

9月2日(土)

AIDS 一その治療・予防と問題点一

大阪大学微生物病研究所 教授 上田 重晴

全身用貼付剤の展望と経皮吸収の将来

大阪薬科大学 教授 酒井 清

9月9日(土)

血液をとりまく最近の話題

元大阪市環境保健局医務監 田辺 香苗
前南大阪赤十字血液センター所長

セロトニンと精神機能

広島大学医学部 教授 瀬川 富郎

平成2年度 大学院博士前期(修士)課程 入学試験結果

平成2年度大学院博士前期(修士)課程の入学試験は下記のとおりであった。

願書受付期間 9月18日～9月30日

学力試験 10月7日

合格発表 10月13日

志願者 男子20名(学外1名)

女子3名 合計23名

合格者 男子17名 女子2名 合計19名

尚、薬品製造学、衛生化学については二次募集を行うことになった。募集要項は近く決定する予定である。

就職部だより

☆ 3年次生は就職活動を始めよう

先輩達の就職活動もほぼ終り、就職について「いよいよ自分の番だ」と真剣に考え始めたことでしょう。

空前の超売り手市場という学生にとっての好条件があることは事実ですが楽観は禁物です。

企業の採用基準は人物本位（面接重視）の傾向が強いというものの、それはあくまでも基礎学力（特に語学力や薬学専門科目）の裏付けがあってこそその話です。

3年次までの成績が個人評価として企業へ提出されるわけですから来春1月の定期試験に全力をあげて取り組み、大いにレベルアップを図って下さい。

☆ 自分を見つめ直そう

就職というと企業のことばかり気になりがちですが、一方企業側は自分自身のことすらしっかり把握できていない学生を相手にするはずがありません。

自己分析といってもあまり堅苦しく考えず、今までの自分の歩みを振り返りアピールできること（学業、

性格、資格、クラブ活動、社会的関心など）を自分なりに整理しておくことです。つまり大阪薬科大学でこれだけは人に絶対負けないというものを再認識し「だからこういう仕事がしたい」「そのためぜひ貴社に入りたい」と自信をもって面接で志望動機を主張できるようにしておくことが大切です。

☆ 就職対策用資料を利用しよう

学生課や就職資料室に常備していますのでぜひ利用して下さい。

〔参考文献〕

会社四季報、就職四季報、時事問題の基礎知識、面接試験の受け答え88例、最新就職事情、OB訪問・会社訪問合格法、就職の基礎知識、日本病院薬剤師会会員名簿、近畿病院名簿、薬業会社録、大阪府薬剤師会会員名簿など

〔企業紹介用ビデオ（VHS）〕

堺化学工業、参天製薬、大日本製薬、大鵬薬品工業、武田薬品工業、田辺製薬、東京田辺製薬、日清食品、日本アップジョン、日本イーライリリー、日本ロシュ、藤沢薬品工業、明治製菓、森下製菓、ヤンセン協和など

〔資料〕

卒業生業種別就職試験報告書、在勤卒業生（OB・OG）名簿、企業・病院案内パンフレット、各出版社発行の就職情報誌など。

平成2年度 学部入学試験要項

募集人員	薬学科 120名 製薬学科 120名 計 240名
出願期間	平成2年1月11日(木)～2月2日(金)
試験期日	平成2年2月10日(土)
合格発表	平成2年2月17日(土)
入学検定料	25,000円(銀行振込)
入試科目	数 学 { 数学Ⅰ・代数幾何 ・基礎解析 } 外国語 { 英語Ⅱ・英語Ⅱ _B ・英語Ⅱ _C } 理 科 (化学)
試験場	本学(男子) 代々木ゼミナール大阪校(女子、男子の一部)
入試手続	1次(2月28日(水)まで) 2次(3月23日(金)まで)



傷害保険 Q & A

昭和60年度から学部・院生の全員が加入している傷害保険（「学生教育研究災害傷害保険」）の内容について、Q & A方式でわかりやすく解説します。なお、この解説は次号以降もシリーズ化して掲載の予定です。

Q 1. 現在の保険補償対象範囲は？

A 本保険は昭和51年4月創設以来、2度の拡充・改善を経て昭和58年4月より次のとおりの保険対象範囲となり、現在に至っています。

①正課中 ②学校行事中 ③課外活動中（学校施設の内外を問わず、ただし大学に届け出が必要） ④学校施設内にいる間（①②③以外、主に休憩時間中）

学校施設内にいる間には、学生寮にいる間、大学が禁じた時間もしくは場所にいる間、または大学が禁じた行為を行っている間を含みません。また、通学途上（登下校）の事故は対象外となっています。（なお、保険金額等詳細については、入学時に配布している学生便覧や本保険のしおりをご覧ください。）

Q 2 「傷害」とは？

A 「傷害」とは、一般的にいう「ケガ」という概念が相当します。急激・偶然・外来の事故に起因するものであれば、「ケガ」をとみなさない死亡から内部諸器官の出血、筋違い等も傷害といえます。

Q 3 正課中の事故とは？

A 授業として行われるものであれば、講義・実習・体育実技・学外実習・図書館等での研究活動中の傷害は全て対象となります。

なお、学外実習とは本学の場合、病院や衛生研究所での実習等が該当しますが、「拘束時間」以外の私的活動中の事故は本保険の対象となりません。また、正課中であれば、学外での移動中の事故も対象となります。これには、体育実技中のグラウンド変更のための移動時や学外実習中の移動時等に起こった事故が相当します。

Q 4 学校行事中の事故とは？

A 大学における学校行事とは、大学が主体となり、大学の責任のもとに行われる教育活動をいいます。本学の場合、入学式・新入生ガイダンス・卒業式等が

含まれます。

ただし、学校が主催しない行事であっても、学校を休校とし、学生が全員参加できるような措置がとられている場合は学校行事とみなし対象となります。従って、学友会主催の新入生歓迎会（5月祭）、体育祭、大薬祭等も学校行事に含まれます。

Q 5 課外活動中の事故とは？

A 課外活動中の事故は、学校施設の内外を問わず全て本保険の対象となります。この場合、学校施設外での試合・発表・見学・合宿等には大学への届け出が義務づけられています。大学所定の「対外行事参加届」を行事前に提出して下さい。（これを怠ると保険金は支払われません。）

課外活動は「大学の認めた学内学生団体の管理下の活動」を意味し、具体的には次の場合をいいます。

- ① 所定の場所・時間に集合し待機している間
- ② 団体の活動実施中、移動中および休憩中
- ③ 所定の場所・時間に解散のため待機している間

集合前・解散後の準備運動や後片付け等も課外活動と一体とみられる場合は対象となります。また、試合や発表後の懇親会やレクリエーション（課外活動内容とは全く関係のないハイキング等）を行っている場合でも「団体管理下の活動」中とみられる場合は対象となります。

なお、移動中の事故には「団体管理下の活動」と考えられるのであれば、集合地より試合地・合宿地へ向かう団体行動中（またその逆）も本保険の対象となります。

Q 6 学校施設内にいる間の事故とは？

A 正課・学校行事・課外活動中以外で、学校施設内にいる場合の事故も全て対象となります。従って休憩中の傷害が対象になることにより、学校施設内での事故は、その発生の状況・場所・時間によらず、全てが保険の対象となります。ただし、学生寮にいる間は私的な時間として扱い、本保険の対象範囲とはなりません。また、大学が禁じた時間・場所・行為に該当すれば、対象外となります。例えば、学校施設内でのオートバイ運転中の傷害は、通常保険の対象となりますが、ノーヘルや制限速度の大幅な違反等による事故は対象外となります。

保険金が支払われた例

- ① 正課中

- 地質調査中、岩場より20m転落し、頭骸骨骨折で死亡。(1200万円：最高額)
- 体育の授業中、走り幅跳で踏切の時、左足関節靭帯損傷、部分骨折。(32万円)
- 化学の実験中、誤ってアルコールに引火、顔面に浴びる。顔面部および頸部第2度火傷。(13万円)
- ② 学校行事中
 - 大学祭の模擬店で調理中、コンロのヤカンが足に落ち火傷。(24.2万円)
- ③ 課外活動中
 - 山岳登山路で岩場から足を踏み外し約80m転落。頭骸骨粉碎骨折・全身打撲で死亡。(600万円：最高額)
- サッカー部の練習でヘディングした時、キーパーと激突して脾臓破裂。入院して脾臓摘出手術をうけた。(306万円)
- ラグビー部の練習中、他の選手と接触し、顔面右上頬を複雑骨折(12.4万円)
- ④ 学校施設内にいる間
 - 休憩中、階段から転落して、右足関節靭帯損傷(3万円)
 - 休憩中、キャッチボールをしていてボールで突指、右手人差指骨折(3万円)

特 別 講 演 会

IV 平成1年

IV-1

演題：L-Ascorbic and D-Isoascorbic Acids.Sources of Chirons in Drug Synthesis.

演者：Prof. E. Abushanab
Department of Medicinal Chemistry
The University of Rhode Island, U. S. A.

日時：平成1年4月12日(水)15:30~16:30

場所：大阪薬科大学 21教室

主催：日本薬学会近畿支部

IV-2

演題：Recent Studies on Bioactive Alkaloids

演者：Dr.A.Brossi
Department of Health and Human Services
National Institutes of Health

日時：平成1年5月10日(水)15:30~16:30

場所：大阪薬科大学 学長室

主催：日本薬学会近畿支部

IV-3

演題：経皮吸収に関する研究

演者：Prof. H. I. Maibach
Department of Dermatology
University of California

日時：平成1年7月12日(水)10:30~11:30

場所：大阪薬科大学小会議室

主催：大阪薬科大学

IV-4

演題：Recent Studies on the Synthesis and Biosynthesis of Gibberellins and Other Plant Growth Substances

演者：Prof. L. N. Mander
Research School of Chemistry
The Australian National University

日時：平成1年7月18日(火)15:00~16:00

場所：大阪薬科大学 大会議室

主催：日本薬学会近畿支部

IV-5

演題：Applications of N-Acyl-iminium Ions in Natural Product Synthesis

演者：Prof. W. N. Speckamp
Department of Organic Chemistry
University of Amsterdam

日時：平成1年11月8日(水)15:00~16:00

場所：大阪薬科大学 21教室

主催：日本薬学会近畿支部

平成元年度

平成元年度 後期行事予定

各部・各委員会・委員

[No. 20 (1989.5.25) 掲載以降]

◎は部署の長

学生部	◎森下 利明 (教授)
望月伸三郎 (教授)	稲森 善彦 (教授)
松村 瑛子 (助教授)	
総務委員会	◎藤田 榮一 (学長)
山口 秀夫 (教授)	森坂 勝昭 (教授)
井上 正敏 (教授)	森本 史郎 (教授)
沼田 敦 (教授)	小澤 貢 (教授)
森下 利明 (教授)	栗原 拓史 (教授)
吉野 幸夫 (事務局長)	
施設委員会	◎藤田 榮一 (学長)
山口 秀夫 (教授)	森坂 勝昭 (教授)
酒井 清 (教授)	井上 正敏 (教授)
森本 史郎 (教授)	森 逸男 (教授)
小澤 貢 (教授)	池田 潔 (教授)
石田 寿昌 (教授)	曾根 節子 (助教授)
吉野 幸夫 (事務局長)	

人事異動

学生部長発令 (平成元年6月16日)
森下 利明 (教授)

講師発令 (平成元年10月1日)
辻坊 裕 (第一微生物学教室)

助手発令 (平成元年6月21日)
坂口 実 (生物学教室)
(平成元年10月1日)
山口 敬子 (第一分析化学教室)

退 任 (平成元年6月15日)
望月伸三郎教授・学生部長
(任期満了につき)

退 職 (平成元年9月30日)
西村三栄子 (第一分析化学教室)
上村 咲子 (第一物理化学教室)
(平成元年11月30日)
宇佐美秀子 (第一生薬学教室)
(平成元年6月19日)
藤田 愛弓 (教務課・事務職員)

[1989]

10月2日(月) 後期授業開始
6日(金) 後期選択科目履修届提出締切 (教務課)
7日(土) 平成2年度大学院博士前期 (修士) 課程
入学試験
14日(土) 平成2年度大学院博士前期 (修士) 課程
入学試験合格者発表
21日(土) 体育祭 (臨時休講)
28日(土) 第24回大葉祭 (臨時休講)
31日(火)
11月4日(土) 平成2年度特別実習説明会 (3年次生)
11月6日(月) 前期再試験選択科目受験届提出
(教務課)
11日(土)
8日(火) 平成2年度特別実習配属願提出
(教務課)
14日(火)
12月2日(土) 前期再試験 (1~4年次生)
9日(土)
4日(月) 後期定期試験選択科目受験届提出
(教務課)
9日(土)
15日(金) 平成2年度特別実習配属内定
(3年次生)
21日(木) 前期再試験 (1~4年次生) 結果発表
23日(土) 後期授業終了 (4年次生)
25日(月) 冬季休業

1月6日(土)

[1990]

1月8日(月) 授業再開 (1~3年次生)
9日(火) 後期定期試験 (4年次生)
11日(木)
13日(土) 後期授業終了 (1~3年次生)
16日(火) 後期定期試験 (1~3年次生)
27日(土)
24日(火) 再試験 (4年次生)
31日(火)
2月8日(木) 第1次卒業生発表 (教務課)
10日(土) 平成2年度学部入学試験
14日(火) 特別再試験 (4年次生)
17日(土)
17日(土) 平成2年度学部入学試験合格者発表
20日(火) 再試験 (1~3年次生)
3月3日(土)
2月27日(火) 第2次卒業生発表 (教務課)
3月14日(火) 進級者発表, 再試験結果発表 (教務課)
20日(火) 第37回学部卒業式並びに第14回大学
院修了式